

50. ハタハタ *Arctoscopus japonicus* (Steindachner)

図版19

英名 sailfin sandfish

露名 японский волосозуб

漢字 鱒、鰯、雷魚、燭魚

アイヌ語名 パタパタ、オタスイコル、ヤンチボル

【形態】 体はやや細長く、強く側扁*する。体にうろこ側線*がない。口は大きく、著しく斜めに向く。下あごは上あごより突出する。えらぶたに5本の鋭い棘*を持つ。背びれは2つで著しく離れる。第1背びれは高く、三角形。胸びれは大きい。尻びれの基底*は著しく長い。尾びれの後端はほぼ直線状。体の背側*は黄褐色で不定形の黒褐色斑を持ち、腹側*は銀白色。

【生態】 山口県以北の日本海、オホーツク海、宮城県から千島列島を経てカムチャツカ半島東岸に至る北太平洋に分布する。北海道に分布するハタハタは鰭条*数や脊椎骨数、産卵場の比較から石狩群、網走群、根室群、釧路群、日高群、噴火湾群の6系群*に区分する見解が一般的であったが、アイソザイム*分析では太平洋の3群には遺伝的な差はみられていない。さらに体形、寄生虫*の寄生*率、卵塊*の色などの違いに着目した最近の研究でも、産卵場ごとに群を区分できず、ハタハタの系群はまだ明らかではない。

北海道北部の日本海では、産卵期以外の時期には水深150~300m前後の天壳舟状海盆*周辺や武蔵堆*などの砂泥域に分散して分布する。生殖巣が成

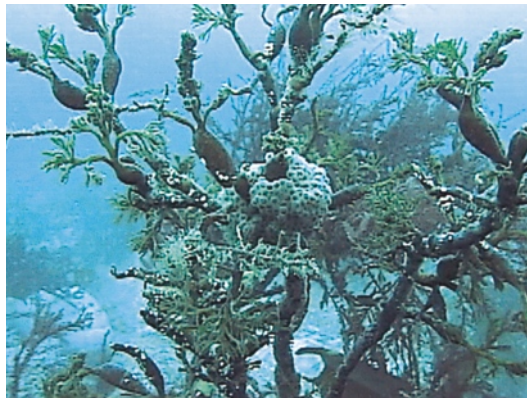
熟*し始める10月上旬から南下を始め、10月下旬から11月上旬には雄冬岬沖に密集し、11月中旬から12月上旬ごろに厚田の産卵場に一気に来遊する。

北海道での産卵期は、オホーツク海の斜里海域で最も早く10月下旬～11月中旬、えりも海域で11月下旬～12月上旬、噴火湾で12月上旬～中旬である。各海域ともに産卵盛期は短く、1週間から10日間程度である。

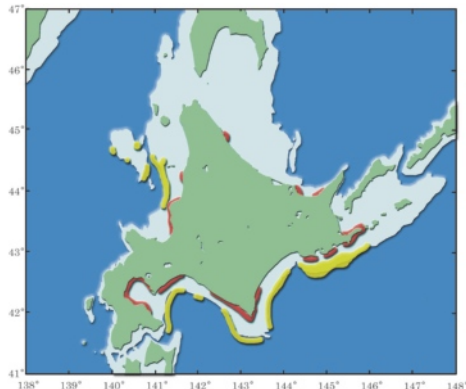
産卵場所は藻場*で、厚田海域では水深2m前後、えりも海域では水深2～10mにみられる。卵塊を産みつける海藻は一般に茎のしっかりしたもので、厚田海域ではホソメコンブ、ツノマタなど、えりも海域では主にウガノモクである。産卵群の年齢構成は満1歳魚が多い年と満2歳魚が多い年がみられ、各海域とも3歳以上の魚は少ない。

抱卵数*は太平洋沿岸では、体長*15cmで約1,000粒、20cmで約2,400粒で、同じ体長では西の群ほど多い傾向にある。日本海産は太平洋産より抱卵数が少なく、厚田海域では体長17cmで950粒、20cmで1,600粒、22cmで2,200粒。付着沈性卵*で、卵の直径は2.6～2.9mm。雌は主に夜間から早朝に産卵し、ほぼ全数を一度に直径4cm前後の卵塊として産み出す。海水に触れると、その中心にある粘着物質が溶け出し数十秒で固まる。卵塊の色は個体ごとに異なり、餌の種類や摂取量に影響されるという報告もある。

受精からふ化までに要する日数は水温6.4～7.8℃で



ウガノモクに産み付けられたハタハタの卵塊（えりも町）



ハタハタの産卵場(赤)と沖合底びき網漁場(黄)

68～83日、12.5°Cで49～56日。厚田では、2月に全長*約12mmでふ化した仔魚*が、6月には体長30～40mmになる。産卵期における体長は、雄は満1歳で15cm、2歳で18cm、3歳で22cm、雌は満1歳で17cm、2歳で20cm、3歳で24cmで、噴火湾のものに比べて各年齢とも1cmほど小さい。日本海では仔魚はふ化後しばらくして藻場から砂浜域（さびん）に移動し、沿岸水温が高くなると沖合の深みに向かう。

稚魚*は浮遊性のカイアシ類*、ミジンコ類、オタマボヤ類*などを主な餌とし、全長40mmになるころから底生性のヨコエビ類*やワラジムシ類*などもとり始める。索餌*群はこのほかオキアミ類*、エビ類、魚類なども食べる。